

---

# Noise

神宮寺飛鳥

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Noise

### 【Nコード】

N9689C

### 【作者名】

神宮寺飛鳥

### 【あらすじ】

それは、少年が見た夢。三人の主人公の視点で事件の真相に迫るミステリー。東京に住むごく普通の少年、遠山マサキは兄の唐突な失踪の一年後、兄が最後に訪れた地へ向かう電車で揺られていた。小瀬と呼ばれる田舎に住む親戚、八神家を夏休みを利用して訪れたマサキは兄の痕跡を探し始めるが・・・。

## Prologue

思えば、全ては破綻していた。

流れる水の音。停滞している世界の中、それだけはゆっくりと動いているように感じる。

目も、耳も、全ての五感が消え去ったというのに、それだけは感じ取れる。

静かだった。自らの肉体すら存在しない完全なる暗闇。それは恐ろしく、しかし安らぎを感じる。

手・・・そう感じられる何かをゆっくりと動かせば見えない壁に覆われていることが判る。

手・・・なのかどうかはわからない。今となつては既にどうでもいい事なのかもしれない。

何もかもが終わっている。いや、始まって居ないのか。曖昧な自己意識と肉体の境界線。

溶け合つていくような緩やかな時間の中、繰り返し思い出す景色がある。

あの日、あの時、僕に一体何が出来たのだろうか？

無限に続くような停滞した時間の中、繰り返し続けた後悔。

今でも強く覚えている。生臭い血のおいも、振り上げた狂気の重さも。

だから僕はきつと忘れない。そして思い出し続けるのだろうか。

何度でも繰り返し、繰り返し・・・。

暗闇の中、誰かが僕に微笑みかけている。

きっと時間は止まらないのだと、彼女は僕に告げている気がした。

## Noise

自分が目にした事もない景色を思い浮かべる。

その物語には二人の人物が出てくる。そして彼らは僕の中で語る。

少年は自らの因果と追い求める背中を捜し、血に染まった道を歩み始める。

青年は自らの正義と追い求める友人を探し、闇に暮れた道を歩み始める。

そして僕は眠り続ける。目覚める事も無く、終わる事も無く。

ただ静かに、世界を見守っていた。

夢を見ていた。

その夢の中で俺は、当たり前のようにマンションのコタツで小説を読んでいた。

その小説を貸してくれた張本人はエプロン姿で両手に皿を持って歩いてくる。

テーブルに並べられた料理たちはとても男が作ったとは思えない絶品ばかりだった。

勿論、男性が料理を作れないなんて偏見があるわけではない。ただ、彼には似合わないというだけで。

いや、似合うのかもしれない。エプロン姿の男はコタツに入るなり穏やかな笑顔を見せた。

「いつまでも本ばかり読んでいないで食ったらどうだ？マサキ」

「ああ……」

手を合わせいただきます。

食事に関して彼は非常にうるさい。いただきます、ごちそうさまでした。これは必須だった。

眼鏡の向こう、凜とした瞳が嬉しそうに自らの作った料理を見つめている。

そんな姿を眺めながらリモコンを手に取りTVの電源を入れる。

しかしろくな番組がやっていない。当たり前だ、今日は平日。しかも真昼なのだから。

昼ドラを見てもいいが、これといって面白くはない。それに彼はそういうのは好まない。

だから俺は大人しく二ユースにチャンネルを合わせて箸を進める。夏休み。高校生になり二度目の夏。いつまでもしまわないまま放置されたコタツがなんとも言えない部屋。

1LDKの部屋。とんでもなく広いわけではないけれど、二人暮らしには十分な広さ。

尤も、俺も彼もここに居る時間はそれほど長いわけではない。高校生の俺は家でじっとしている世代ではないし、彼は勉強に終われ帰宅は遅く、帰ってきても本ばかり読んでいた。

彼・・・実の兄である遠山コウヤは医大に通う有能な学生だ。勤勉でもあり、そのことばかり頭にあるらしい。

白いワイシャツと自分の家だというのにきっちり締められたネクタイがその性格を現しているようだった。

会話はあまりないが、決して仲が悪いわけではない。むしろ仲がいいと言えるだろう。なぜなら彼は俺の意思や行動を尊重し吟味してくれるし、俺は彼のことを尊敬しているからだ。

俺たちは二人ともそれほどおしゃべりではない。だから会話はないが、それは不愉快な沈黙ではない。

テレビから流れるニュースキャスターの声をBGMに兄貴は口を開いた。

「そつだマサキ・・・今年の叔父さんの所だが」

「ああ、そんな季節か」

俺たちには叔父さんがいる。特に異常なことではなく、ごく普通だ。両親の故郷でもある田舎町の屋敷に住んでいて結構な金持ちだということも、それほど珍しいことではない。

何しろ土地だけは有り余っている辺鄙な場所だし、特にこれといっ

て実際は裕福なわけでもない。  
医者のお陰か俺たちは何不自由なく暮らしてきた。こ  
この家賃も両親が払っている。  
特に俺たちを制限するでもなく夢を応援してくれる理解力のある両  
親だ。ただ一つを除いては。

「今年も行かなきゃなんだよな」

それは、毎年田舎に住む叔父さんに健康診断をしてもらうことだっ  
た。

昔は家族みんなで盆休みに行ったものだが、最近は兄貴と二人で向  
かうことが多くなった。

健康診断といっても非常に簡単なもので、特にコレといって問題は  
ないのだが……。

「クーラーもない田舎だからな……電車乗り継ぐのも面倒で」

「だけど、あっちにはお前を待ってるお姫様がいるだろ？」

「よしてくれ……ありやまだ子供だ」

叔父さんの娘……つまり従妹に位置する少女に妙に懐かれている。  
毎年あっちへこっちへ連れまわされて居るうちにも田舎に詳  
しくなってしまうた。

しかし、知り合いの居ない町だ。一人でいるよりは随分とましなの  
で助かっているが。

そう考えれば帰郷もそれほど悪くはない。ちよつとした都会を離れ  
てのバカンスだと思えばいいのだ。

それに静かなあの町をそれほど嫌っているわけではなかった。趣味  
の読書が捗るから。

「それで、いつ行くんだ？」

具体的な質問をすると急に兄貴は歯切れ悪く視線を逸らした。珍しい兄の態度に首をかしげていると、ゆっくりと彼は告げる。

「今年は俺一人で行く。だからマサキは留守番しててくれ」

「は？」

「だから、今年は俺一人でいくからお前は来るんじゃない」

しかし、それは親の言いつけを守らないことになる。

無論ただの健康診断・・・というよりは顔見せなので行かなくても全く問題はないのだが。

兄貴一人で行く、というのはどういった見なのか。勿論疑問は多かった。

しかしそのときは特になんということもないのだろうと、あっさりとな納得してしまったのだ。

それから数日後、兄貴は仕度を終えていつものネクタイを締めながら玄関に立っていた。

寝巻きのまま見送る俺を振り返りながら彼は言う。

「いいか、絶対に何があっても俺を追いかけてくるんじゃないぞ」

「・・・いかないよわざわざ・・・遠いからな」

「だったらいい。約束だぞ」

手を振り彼は笑った。

その笑顔を見送りながら、俺は寝ぼけた目を擦っていた。

それから数日後、兄貴は行方不明になった。

Noise

Side:A

Day 1 - 再会 -

心地よい電車の振動に揺られながらゆっくりと目を開いた。  
何時間も眠っていた気もすればほんの僅かまどろんでいたような気もする。

太股の上に乗せられた文庫本に頬を挟んで閉じ、隣の席に置く。  
人の見当たらないローカル線から見える景色は一面の緑。どこまでも広がる山々。  
開かれた窓から入り込んでくる風が涼しく、爽やかに髪を梳いていく。

と、というか……冷房なんてあるはずがないので窓を開けるしかないわけだが。  
都会では考えられないような静かな景色。吸い込む空気も心なしがすがすがしい。  
大きく体を伸ばして飲みかけのペットボトルを傾ける。

「あれからもう一年、か……」

ため息をつき、座席に深く寄りかかる。

兄貴が失踪してから丁度一年たった夏休み。俺は田舎へ向かう電車に乗っていた。

失踪の話を聞いた時からずっとそうだったが、俺は未だに兄貴が居なくなったことを実感できずにいた。

それは仕方のないことだ。今までずっと一緒だった人物がいきなりきれいさっぱり消えてしまったのだ。

兄貴はついてくるなと言っていた。それが何を意味するのか、何をどうすればいいのか、俺はわからなかった。

探しに行くべきだったのかもしれない。みつともなくわめき散らすべきだったのかもしれない。しかし冷静で冷えている自分自身の思考回路がそれを許さなかった。どこを探せばいいのか、誰に当たればいいのかわからない俺は、ただ阿呆のように日常を繰り返す事しか出来なかった。

だから何も変わらない。家事の担当が一つ増えたというだけで、何もかもが。

変わっていないと、言い聞かせてきた。気にしないようにと、必死に。

けれどこうして一年の月日が過ぎ去り、あの場所に向かう今になって思う。

何故俺は、彼を一人で行かせたのだろう、と。

何があったのかはわからない。『ここ』は関係ないのかもしれない。しかしそんなのは関係がない。

俺は、彼についていくべきだった。彼に降り注いだ不穏な何かから守るべきだった。

そんな事を今になって思う、そんな自分はやはりまだ子供なのだろう。

微かに胸に沸いた不安をかき消すように立ち上がった。

電車の中を見渡すと、いつから居たのだろうか？夏だというのに黒いロングコートを羽織った男性の姿が見えた。

コートの下はワイシャツ。だらしなく緩められたネクタイがなければ公務員にしか見えない。やがて男はコートを脱ぎ去ると大きくため息を付きながら煙草に火をつけた。

いかにも気の強そうな目。鍛えられている筋肉が捲くられた袖から露出している。

ぱったりと、目が合う。男は軽く微笑みながら会釈するとあるうことか声をかけてきた。

「よっ！」

「は…….……こんにちは」

「まさか人が乗ってるとは思わなかったぜ」

「俺もです」

「目的地は…….……聞くまでもないか。この先にはあそこしかねえしな」

紫煙を吐き出しながら男は笑う。悪い人間には見えないが、なんだか馴れ馴れしい。

窓の外を眺めていると山の合間によくやく町の姿が見えてくる。それを見つめながら俺は自分の席に戻った。

あとはゆっくりとした時間が流れ、電車は駅のホームに停車した。真夏の太陽はじりじりと焦がすように降り注いでいる。遮るものが何もないそれは直接俺を見つめていた。

一足先に去ったのだろう、男の姿は見えなくなっていた。鞆を背負い、歩き出す。

駅といってもあまりに小さなそれから出るのに時間はかからなかつ

た。駅前と呼ぶには少々寂しすぎるそこで深呼吸する。

何となく、帰ってきたという気分になる。帰るもなにもないのだが、懐かしい風景に思わず頬が緩んだ。

ひび割れた白いコンクリの地面の上、電話ボックスを背に少女は立っていた。

「あつ！おにーちゃん、久しぶり！」

「・・・カガリか？でつかなくなったな」

白いワンピースが風に揺れる。麦藁帽子の影から除く笑顔が俺を捕らえていた。

八神カガリ。確か今年で十二歳になるはずの従妹。毎年会っていたのだが、去年を開けて二年ぶりの再会なので少しだけ印象が変わっていた。

全体的に自分が知るそれよりも大人っぽく・・・とは言えまだ子供・・・になった姿に思わず笑みがこぼれる。

「身長伸びたな・・・いくつになった？」

「んと、130くらい」

想像以上に小さかった。

「お姉ちゃんにはまだまだ追いつかないか」

「んー・・・あれは身長高すぎなの・・・まだ伸びてるかもしれ  
ないよ」

唇を尖らせながらカガリは笑う。

二人横に並んで真夏の太陽の下を歩いていく。

荒川町、というのがこの町の名前だった。ここは田舎なりにまだ近代的で、喫茶店にはエアコンも配備されている。

しかしローカル線の最後を飾るに相応しい田舎っぷりであることは否めない。

目的地はこのさらに先にあった。この町と山一つ挟んだ場所に目当ての小瀬という場所がある。

厳密にはそれも荒川の一部らしいが、今でも合併する前の小瀬という名で呼ぶのが通例だ。

そこへは山一つ超える・・・のではなく、間に通った小さなトンネルを抜けていく。

軽く3キロ近い距離を伸びているそれを徒歩で通過しなければ小瀬にたどり着くことは出来ない。

周囲を深い山々に囲まれた小瀬の唯一の出入り口だった。当然、大型のトラックなんかは入ることが出来ない。軽トラはわりと通るが、それも稀だ。

そもそも人口が少ないこの町の出入りは異常に少ない。故に長々と続くこの薄暗闇の中を一人で歩かなければならないのだ。

そんな寂しい状況を心配してか、カガリは迎えに来てくれたのだろう。昔から気の効く少女だったが、年々それに磨きがかかっているようだ。

というのは俺の良心的な解釈で、彼女はお喋りがしたい一心だったのかもしれないが。

久々に会う少女はどうでもいいことや下らないことを延々と語っていた。俺はそれを話半分に聞き流しながら相槌を打つ。

いつもは出来る限り丁寧な聞き流しとする言葉たちも今はいまいち頭に入らなかつた。

「それでね・・・おにいちゃん聞いてる？」

「ん？聞いてるよ」

「うそだー聞いてないよ・・・どうかしたの？もしかして疲れちゃった？荷物、カガリが持とうか？」

「いや・・・大丈夫。それにしても長いし暗いなあ・・・」

「カガリは毎日学校行くのここに通ってるんだよ」

「は~~~~~~~~・・・えらいなあ・・・」

本当に頭が下がる思いだ。

もちろん小瀬に学校なんかあるはずがない。小瀬の子供たちは荒川の学校まで通うのだろう。

そう考えるとなんともいえない気分になってくる。この暗闇は都会育ちの俺にはどうにも慣れない。

昔は兄貴と二人で通ったものだから、それほど気にならなかったのだが・・・。

ようやく小瀬にたどり着くと、一面に広がる畑と砂利道。ため息を付けどもまだ屋敷は見えてこない。

ここからさらに歩き続け、奥の奥へと進んでいく。屋敷はしばらくすればすぐに目に入った。大きい上に視界を遮るものが極端に少ないからだ。

屋敷に到着する頃にはすっかり全身汗だくになっており、息も絶え絶えだった。

カガリを見るとまったく顔色一つ変えていないのだからたいしたものだ。冷静に思い起こしてみれば彼女は迎えに来たということはあそこを一人で片道歩いたということになる。なんとも根性の据わった十二歳である。

「ただーいまー！」

サンダルを脱ぎ散らかして廊下をどたどた走っていく……ってサ  
ンダル！？マジか！？

そんな従妹に続き「お邪魔します」と声をかけながら上がるととり  
あえず居間を目指した。

純和風の屋敷の居間は当然畳張り。昭和の雰囲気が漂う木製の家具  
たちが目に付いた。そのどれもが懐かしい。

畳の上に置かれたちゃぶ台ではこの部屋にそぐわない新品のノート  
パソコンが画面を光らせており、カガリの姿は見当たらなかった。  
パソコンの画面を覗き込むとそこにはわけのわからない英文がづら  
づらと並んでいて頭が痛くなった。

荷物を降ろしてため息を付いているとカガリが元気よく居間に飛び  
込んできた。

「おにーちゃん、お姉ちゃん連れてきたよ！」

「マサキ……元気だった？」

「あなたは既に死にそうだな……」

黒いタンクトップのシャツに短いジーンズを履いた長身の女性は長  
い髪をゴムで結びながらとろんとした目で微笑んだ。

どうみても寝不足だった。何が理由かはわからなかったが、とにか  
くそういう雰囲気だった。

八神ホムラ。カガリの姉であり、俺の従姉に値する人物だ。年齢は  
確か二十いくつ……兄貴と同年代だったと思う。

カガリとは随分と歳が離れているが、ホムラがカガリを可愛がって  
いるのか、二人の関係は非常に良好だ。

「うーん・・・マサキが来たらこのナイスバディで抱きしめて未熟な若い性を誘惑しちゃおうかと思ってたんだが、正直そんなことをするテンションはもう残ってないんだよね」

「そんなことしないでくれ。あとあんたはまだ若いだろ」

「いやいやいやいや、ハタチすぎたらもうオバサンだよ!」

何いってんだこの人。全国の二十代に謝れ。

とは誓って口にはしない。畳の上に座ると彼女たちも同じく畳に座り込んだ。

改めて見ると何とも無防備な格好だったが、いちいちここで顔色を変えるほど不慣れではない。

毎年毎年来る度に彼女は無防備なのだから、もうこれが基本的なスタイルに見えてくる。

「このパソコンは？」

「あー、二年前に新調したんだよ。前に使ってたのがついにお亡くなりになってね」

彼女はまだ学生だったが英文翻訳のバイトをしていた。それは昔もそうだったが、どうやら今もそうらしい。

何もかもかわらない家に思わず心が安らぐ。こうしていると時間がひどくゆっくり進んでいくようだ。

「くかー」

「寝るな」

「おつと・・・危ないところだった・・・だめだ、適当にくつろいでくれマサキ・・・あたしは寝る」

「そうしてくれ」

ひらひらと手を振りながらホムラは居間を出て階段を上っていった。残されたのは俺とカガリだけ。すると少女は唐突に立ち上がり、胸を叩いて言った。

「今日は歓迎にお料理作ってあげる！おいしいの作るから期待しててね！」

十二歳が作る料理に何を期待すればいいのかわからないまま俺は頷いた。

とは言えきつとこの家の家事はカガリが一身に引き受けているような気がしたので危険はないだろう。

そう、この家に母と呼べる存在はいない。何年も前、俺が物心着くころには既に存在しなかった。

行方不明になったという話だけ両親のどちらかになんとなく聞いた覚えはある。しかしそれを彼女たちに訊くことはなかったし、わざわざ話題に上げることでもなかった。

何はともあれ彼女たちは父親である叔父さんと三人で暮らしているわけだが、あの叔父さんが料理している姿は想像つかないし、ホムラが料理しているのはさらに理解に苦しむ。だとすれば十二歳の少女が台の上に乗ってフライパンを握っているほうがまだしっくりくるというものだ。

一人で納得しながら頷いていると窓から入り込んでくる涼しい風に思わず視線が奪われる。

窓の向こうには一面の山。この屋敷の裏は山であり、森である。

気づけば体が動いていた。縁側に出ると都会とは明らかに違う空気

が大気を覆っているのを感じる。  
清しい空気を吸い込みながら読みかけの文庫本を開き、暇を潰した。

気づけば景色は夕暮れに染まり始めていた。それほど長い時間歩いていたのかと思うとどっと疲れが湧いてくる。

しかしこれはこれでいいものだ。それくらいの価値はもしかしたらあるのかもしれない。

本のページを捲りながらふと思う。今年は隣に誰も座っていない事に。

俺がこの場所に来る事を決めた理由の一つに、きつとあるのだろう。行方不明になった兄の真実を知りたいという気持ちが。

「おにいちゃん、もしかして退屈？」

振り返るとそこには力ガリが立っていた。縁側に同じように腰掛けると俺の顔を覗き込む。

「料理はどうしたんだ？」

「ご飯炊いてるの。退屈だったら力ガリがお話相手になってあげる」

「そうか……叔父さんはどうしたんだ？姿が見えないが」

「ん〜と、お父さんは今年は忙しいから力ガリがお兄ちゃんのお相手しなさいって言われてるの。そういえばお兄ちゃん今年はどうくらいこっちにいるの？」

「んー……まあ夏休みだからどれだけ居てもかまわないんだけどな」

「ほんと？じゃあ夏休み終わるまでいれば？」

「それは……半月以上ここにいろってことか」

「嫌？」

「嫌じゃないが……ちょっと肩身が狭いかなあ……ははは」

その言葉の意味がわからなかったのかカガリは首を傾げていた。少女の頭の上に手を乗せてぐりぐりと撫でる。

「それじゃあ今年はどうしようかな……」

「大丈夫！カガリがちゃんとエスコートしてあげるからね」

若干不安を覚えるエスコートだが、まあよしとしよう。

「もしかして疲れちゃった？もし早く寝るならお風呂沸かすから言っつてね」

「本当に全部カガリがやってるんだな……俺も自分でやってるけど偉いな」

「む……それは子供って意味かな……？でも仕方ないの、お姉ちゃんは家でごろごろしてるぐーたらだし、お父さんはお仕事忙しいからカガリがやるしかないの」

そう語るカガリの表情はやっぱりどこか誇らしげだった。

二人並んで夕日が沈んでいく様子を眺めているとにっこりと微笑み

カガリが言う。

「でもよかったあ……今年もお兄ちゃん、来てくれないんじゃないかと思ってたから」

「……え？」

「だって去年は……」

彼女が言わんとすることはわかった。

もしかしたら迎えに来たのも本当は俺が来るかどうか不安だったからかもしれない。

去年、兄貴は確かにここにいた。そしてきつと同じようにこの景色を眺めていたのだろう。

そしてカガリはそれを知っているからこそ、俺が今年もここに来ないのではないかと考えた。

「ごめんね……カガリもね、一生懸命探したんだけどね……」

「

「……気にするな。誰かのせいってわけじゃないさ……」

兄貴はこの町で、唐突に居なくなってしまった。

勿論カガリもホームラも探したのだろう。それでも見つからなかったし手がかりもなかった。だから失踪。

その前日までカガリは一緒に居たのだというのだから、彼女が責任を感じてしまっても仕方ないことだろう。

そんな不安を少しでも払拭出来るように、俺は怒っては居ないと示すように、優しさを込めて頭を撫でる。

カガリはそれを判ってくれたのか、今日始めて見るようなとびきり

の笑顔で応えてくれた。

どたばたと音を立てながら台所に向かって走っていく後姿に思わず苦笑しながらもう一度縁側に視線を向ける。

「え？」

思わず呟いていた。

ついさっきまで誰もいなかったはずの景色に人の姿が浮かんでいたからだ。

山の麓、ここからは少しだけ遠い場所、確かにそこに立っていた。二人で眺めていた時には存在しなかったその人物は明らかに俺のことを遠く見つめている。

全身をすっぽりと包む黒いコート。一瞬電車の中であった人物を連想したが、明らかにそれとは違う。

どことなく異質な雰囲気を感じる。サングラスの向こう、見えもしない目が鋭く光っているような気がした。

いかにも怪しい格好のそれはじっと身動きもせず俺を見つめている。

「………？」

それが風景画の一部ではなく生きているものだということはすぐにわかった。

ゆっくりとした足取りで歩き始めると屋敷の前の道を通り過ぎていく。

その縁側から見える視界から消え去るまで、男は俺のことをじっと見詰めていた。

「なんだっただ………」

引きつったように歪んだ口元の笑顔。

長く伸びた髪が不気味に風にゆれていた。

まるで幻にでも遭遇したかのように現実味のない感覚。

目を閉じ頭を軽く振って気を取り直すと、勿論その影はどこにも見当たらなくなっていた。

縁側から立ち去るため本を閉じて立ち上がる。

振り返ればそこに立っているような不吉な感覚に思わず立ち止まるが、当然そこには何もいない。

居間に戻ると聞こえてくるカガリの鼻歌と軽快な包丁のリズムにようやく緊張が解けた。

ただ、その時既に何かを感じていたのかもしれない。

ざわざわざと、背中の辺りを駆け巡る奇妙な感覚。

畳の上に寝転び座布団を枕代わりにして目を閉じた。

やはりきつと、疲れているのあろう……。

「おいこら、邪魔だぞ少年」

「うっ」

蹴り飛ばされる痛みで目が覚めた。

うとうとしていた頭を強引にたたき起こすと目の前にホムラの顔があった。

いくらか眠って体調が回復したのか、相変わらず強引な態度で起こしてくださった。

ちゃぶ台には既に料理が並んでいて外はいつの間にか真っ暗になっていた。

エプロン姿のカガリが妙に大盛りのご飯を乗せた茶碗を片手に走っ

てくる。

「はい、これおにいちゃんの分ね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ドラゴン ールじゃないんだからこんなに食べないけど。

ふと思えば以前ここに来た時は兄貴が料理をしていたことを思い出  
す。

今年はカガリ・・・その変化がなんだか寂しく、新しくもある。

「ん〜今日は天ぷらかあ〜・・・揚げ物つまーい」

「こら・・・・・・・・あんた勝手に食いだすな。いただきますがまだだ  
ろっつが」

「あははははは！お兄ちゃん、コウヤお兄ちゃんとおんなじことい  
ってるー！」

「同じ事を言われる前に学習してくれ」

「ちっ・・・・・・・・そんな嫌なとこだけ似なくていいっつーの」

態度の悪い姉もしぶしぶ「いただきます」に付き合ってくれた。

なんだかんだで楽しい食卓が始まった。味のほうは意外にも評価出  
来るもので、今後の食事には期待できる。

俺よりもカガリよりもただ寝ていただけのホムラが食べまくってい  
ることに多少の違和感があるが。

強引に揚げ物を口に突っ込んでいくその姿を兄貴が見たら注意しま  
くりそうな気がした。

「そんなにじつと見つめたらテレちゃうだろう」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あからさまに困った顔しないでよね・・・・・・・・寂しいじゃん」

そう思うなら最初からやらなければいいのに。

「そういえばマサキ、今年はいつまで居るの？」

「特に決まっではないが」

「明日からの予定は？」

「・・・・・・・・それも決まってる。まあ、適当にぶらぶらするわ・・・・・・・・それより叔父さんの予定は？」

「ああ・・・・・・・・そっか、健康診断で来てるんだっけ？まあ一週間もすれば手も空くんじやないかな」

「それじゃあ一週間はいるんだよね！？やたっ！」

「一週間か・・・・・・・・長いな・・・・・・・・まあ気長に待つぞ」

それに一週間もあれば、色々なことが可能だろう。

自分の頭の中、心の中の片隅にある選択肢がゆっくりと動き出す。失踪した兄貴の手がかりを探す・・・・・・・・そう、きっとその目的は最初から俺の中にあった。

一年も前のことだ。もつどうにもならないかもしれない。それでも

俺は……。

「またそうやって無愛想な顔して……もっとスマイルスマイル」

「生まれつきだよこの顔は……悪かったな」

「拗ねるなよ少年。ほら、あたしのピーマンあげるから」

「あーっ！……だめだよおにいちゃん、それ食べちゃ！苦手なものもちゃんと食べなさいって言ってるでしょ！？」

「だってえ……天ぷらにしてあってもピーマンはピーマンだよ……」

「む……ちゃんとお食べなさい！」

「はい……」

これじゃどっちが姉だかわかったものではないな。

そんなことを考えながら食事が終了し、カガリが沸かしてくれた風呂に一人浸かる。

明日からのことを考えると色々と悩みは尽きなかったが少し熱すぎる湯船に浸かっていると全てを忘れられそうなきがした。

「兄貴……」

夜空に浮かぶ月や星たちが美しく見える。

目に焼き付けるようにゆっくりと瞼を閉じ、湯船にゆっくりと沈んでいく。

今からでも変えられるだろうか？

今からでも間に合うだろうか？

誰とでもなく、ただぼやくように、愚痴るように。

湯船の中、言葉にならない想いを張り巡らせていた。

砂利を踏む足音。靴の向こうから伝わってくる不規則な反動が疲労を蓄積させる。

歩きなれたアスファルトとは違い、舗装されていない道たちはただ歩くだけでもそれなりの運動になる。

太陽が昇りきっていない朝方の空気は夜を経て静かに冷え、肌寒さすら感じられた。

ポケットに手をつ突っ込んだまま歩く道程。大きく息を吸い込み、霧がかつた景色を見渡す。

行けども行けども景色は田畑と森ばかり。村の中央を大きく分断する水路を流れる水音だけが世界の全て。

小さな橋を渡ると水車小屋が見えた。今は流石に動いていない様子だったが、ずっと昔かある懐かしい景色の一部だ。

何かが変わるということがこの場所ではそう多くないのだろう。流れる景色はどれも見慣れたものが多い。

自動販売機すら一つとして存在しない田舎の道をただ一人、歩いていく。

田舎の朝は早い。寝付くのが早いのだから当然なのかもしれないが、朝っぱらからカガリにたたき起こされた俺は朝食が出来るまでの時間を散歩に使う事にした。

この場所で何か変化があれば、それが兄貴のことに繋がるかもしれないと考えたのもある。

しかし実際にこの場所を歩けばよくわかる。異質なことなんて何一つ存在しない、あの頃のままの小瀬だ。

だからこそ余計にわからなくなる。一体何がどうなって兄貴は行方不明になったのか。

そもそもそれはこの場所に関係があるのだろうか？ 思えば馬鹿馬鹿

しい推測であると言わざるを得ないだろう。

この場所に行くと言われただけで、ここに確かに来たというだけで、ここで居なくなっただとは限らないのだから。

それでもここからどこへ向かったのか、それくらいの手がかりはあるのではないかと淡い期待を抱いていたのだが、そんなものがあるればカガリやホムラが俺に黙っているとは考えにくい。

「全くの無駄足、か……」

歩いたせいか、少しだけ火照った体を冷ますためシャツのボタンを一つ開ける。

余計な事は考えず、今ここにある事を楽しむべきなのかもしれない。そもそもあの兄貴が考えなしに居なくなっただとは考えにくい。だとすれば戻るべき時がくれば戻ってくるのかもしれない。

矛盾、そして納得の行かない想いを抱えながらもそう考えることにした。

どちらにせよ、仕方がないことだ。

俺に出来ることなど、余りにも少ないのだから。

Side : A

Day 2 - 休日 -

「おにいちゃん、こっちこっち！」

ゆっくりと歩く俺の前方、カガリは大きく手を振りながら俺を急か

していた。

朝食を食べ終わり、特にする事もなくなった俺に声をかけてきたのは力ガリだった。

昨日の約束通り、十二歳のエスコートとやらが始まったらしい。木製のバスケットに朝食と一緒に作っただけの簡単なお弁当を詰め、遊びに出かける事になった。

とは言え、何をどうするのか俺はまださっぱり聞いていない。勿論進行方向からある程度の推測は出来るものの、それをわざわざ口にするのは彼女の得意げな笑顔を崩す事になりそうなので自重することにした。

荒川と小瀬には丁度真っ直ぐに流れる川がある。厳密には真っ直ぐではなく当然紆余曲折しているわけだが、何はともあれ小瀬を上流とするその川は荒川にも流れている。

しかし荒川に流れているそれと小瀬のそれとは透明度が違いすぎる。汚す必要も汚すものも存在しない小瀬に流れる川は恐ろしく綺麗なのだ。

これにも当然名前があるのだろうが、俺はそこまで詳しくない。ただ、小瀬で川といえばこれを思い浮かべるのは当然の流れだった。そしてこれもまた予想通り、少女が誘導した先に流れていたのはその川で、川原に転がった砂利たちを踏みしめながら俺は苦笑していた。

「今日はここで水遊びをしまーす」

「水遊びですか？でも残念ながら俺は着替えを持ってきていませんが」

「はいそれは心配ありません！さっき力ガリが持ってきておきましたー！」

抜け目のない十二歳である。

何はともあれバスケットを片手にどんどん力ガリは上流へと向かっていく。

ただ遊ぶだけならばもつと下流でもいいと思ったが今日は彼女のエスコートに従うことにした。

やがて小瀬からも随分離れた上流・・・小さな滝を越えた場所で少女はバスケットを大きな岩に降ろした。

「ここなら大丈夫です」

何が大丈夫なのかさっぱりわからなかったが俺はとりあえず頷いておく。

ここまで平然とサンダルで上ってくる力ガリの体力に驚いている俺にとって何が大丈夫なのかは激しい疑問だったが、そこは頷いておく。

「おいしよっ」

「ぶっ」

唐突に少女はワンピースを脱ぎ去った。

慌てて視線を逸らそうとしたところ、その下に紺色の水着が姿を現した。

下に着てきていたのだろう。恐らく学校で着ているらしいそれは胸元に大きく『八神』と縫い付けてあった。

色気も何もないが、十二歳にそんなことは期待しないのでとりあえず腕を組んで頷いておく。

「それで、俺はどうすればいい？」

「ん〜・・・入れば？」

いや・・・それは遠慮願いたいところだが・・・。  
着衣泳というのは思いのほか疲れるものだ。ここまで歩いてきただけで疲れ気味な俺は出来れば座って本でも読みたい。

誤解がないように弁解しておく俺は決して体力が無いわけではない。この山道が過酷すぎるだけだ。

「何か疲れない遊びはないかな？」

「お兄ちゃん相変わらずのめんどくさがりっぷりだね・・・せめてその石から立ち上がりなよー」

「わかった・・・で、何か疲れなくて俺もカガリも楽しい遊びはないか？」

「そんな都合のいいお遊びないよ・・・じゃあ水鉄砲でも撃つ？カガリ逃げるから」

「名案だな。任せてくれ、射撃には自身がある」

水を満タンに汲んだ水鉄砲を両手に構え、川の浅瀬を走るカガリを狙って撃つ。

しかし、これはこれでなんだか危ない映像のような気がしてきたがそれは気にせず頷いておくことにした。

こちらとは打って変わってカガリのほうは一体何が楽しいのかわからないがきゃあきゃあ言いながら走り回っている。

そうなつてくると俺もまじめにやらねば失礼なので本気で追いまわしながら水鉄砲を撃つ。

こうなつてくると本当に危ない映像に他ならないが、客観的に想像

しない限りはほほえましい映像のはずだ。

「ぷあつ！お兄ちゃん狙いが正確すぎてすんごい水飛んでくるよお！手加減してよ！大人気ないなあ！」

「すまない」

「も……おにいちゃん何やるにもまじめすぎだよ」

「すまない」

「ま、そこがおにいちゃんらしいんだけどね」

何故十二歳に説教されてフォローされなければならぬのか。そうしてしばらく水遊びは続き、一息ついた頃力ガリが川の中腹を泳ぎ始めた。

俺のイメージの中のカガリはどうにもあまり元気ではないような気がしていたのだが、それは思い過ぎだったのだろうか？

何はともあれ随分と泳ぐのが得意な少女を岩に座って眺め続ける。

「おにいちゃんも一緒に泳ごうよ？」

「それは遠慮しておく」

「なんで……ノリが悪いよ」

「自慢することではないが、俺は泳げないからな」

「……そんな真顔で言わなくてもいいのに……だったら力ガリが泳ぎを教えるよ」

「……若干不安があるからやはり遠慮しておく」

「だあつ!!!」

両手で大量の水を巻き上げたカガリの動きがスローモーションのように見える。

頭上から降り注いだ水が冷たく服に浸透し、前髪を顔にへばりつかせる。

一瞬何が起きたのか理解出来なかった俺はその後もしばらくそのままの姿勢で目をぱちくりさせていた。

「あははははっ！ほら、もう濡れちゃったから大して変わらないよ」

「………いいだろう、そこまで言うのならやってやる」

川の奥へ奥へと逃げていくカガリを追いかけて水に足を踏み入れた。流石に水着で小柄なカガリと俺とでは随分と機動力が違うのか二人の距離はどんどん広まっていく。

その間にもカガリは水をばしゃばしゃと巻き上げては俺の顔面に向かってひっかけてくる。

そして実際に入ってみて判ったことだが、この川の水深はかなり深い。中央まで行くと俺でも足が着かないほどだ。

この一帯だけここまで深いのか、それともどこもこうなのかはわからなかったが何はともあれとんでもない深さ。平然とカガリが泳いでいたから心配していなかったというのに、これでは俺は溺れてしまうではないか。

「どしたのおにいちゃん……もしかして本当に泳げないの……」

「？」

「生憎冗談は苦手だな。だがしかし力ガリに出来て俺にできないはずが・・・うわあっ!？」

成せばなるという言葉を信じて挑戦してみたがあっさり失敗。死にそうなところを力ガリに助けられるという何とも情けないお兄ちゃんっぷりを披露することになった。

川原まで戻ると笑いを堪えていた力ガリが一気に吹き出し、しばらくその笑いは止まる事を知らなかった。

「ほんつと~~~~に泳げないんだね・・・なんで？足とか速いよね？」

「地上に生きる生物なんだから当然だ」

「ふ〜ん・・・まーいつか、おべんとう食べよう!」

比較的平べったい岩をベンチ代わりに腰掛けサンドウィッチやおにぎりを手に取る。

それがまた思いのほか良く出来ていてこれは将来が期待できるな、などと下らない事を考えていた。

指をぺるぺる舐めている力ガリの頭にタオルを乗せてわしわし拭いて行く。

「でもなんか本当に久しぶりだね。二年ってやっぱりすっごく長いよ」

小学生の時間感覚としては二年は『やっぱりすっごく長い』、らしい。

二年といえば彼女の人生の六分の一に匹敵するわけで、それは当然長いだろう。

しかし俺としてはそんな二年という時間をそれほど長くは感じておらず、その感覚の差に思わず苦笑が零れた。

「俺はこの二年はあつという間だったよ。特に兄貴が居なくなっただけから色々大変だったからな」

「あ、そっか・・・コウヤお兄ちゃんが居なくなっただけで大変だったんだよね」

途端に表情が曇ってしまう。この話題は地雷だったか、と後悔しつつも話を続ける。

「まあ一人暮らしというのも悪くない。何より気軽だし、文句を言うやつもないからな」

「いいな・・・カガリも一人暮らししてみたいけど・・・」

「してみたいけど？」

「あ、ううん・・・お姉ちゃんとかぜーったい料理とかしないし・・・お父さんはほっといたら死んじゃいそうだし」

そんなうさぎみたいな扱いなのか叔父さん。まあ確かに変わった人ではあるがそこまでではないような。

しかし、見間違いだろうか？一瞬だけカガリの表情がなんというか・・・とても暗くなった気がしたのだが。

弁当を食べ終える頃、「ホムラは昼はどうしているのか？」と訊ねると、「カップラーメン置いてきたから大丈夫」と笑顔で答えてく

れた。

家で寂しく一人カップラーメンをすすっているホムラの姿を想像し、静かに笑った。

何はともあれ川遊びを終えた俺たちは来た道を下り、川原を出て山道を歩き、ようやく小瀬に戻ってきた。

カガリは着替えを終えたものの、俺は全身ずぶぬれのままだ。何故かと言うとカガリが持ってきたという着替えは何故か俺の寝巻きだったからだ。そんな格好で出歩くわけにはいかないので結果ことう状況に陥ったのである。

申し訳なさそうに慌てふためくカガリの姿は可愛かったが、流石に水を吸って重い服を装備したままの道程は苦しいものがあった。

「おにいちゃん大丈夫・・・？もうちょっとの我慢だからがんばって！」

「ああ、お兄ちゃん頑張るよ・・・しかし遠いな屋敷が・・・」

そうして肩を落としながら歩いていると、真正面の道をカガリと同年代くらいの少女が歩いてくる。

その姿を見つけるや否やカガリは元気よく手を振り、

「みつちゃんーん！」

と、叫んだ。

みつちゃんは小走りで駆け寄ってくると長い黒髪を揺らしながら笑顔で停止した。

「こんにちは、りつちゃん。えーと、そっちの人は・・・あつ、もしかして？」

「うん、マサキお兄ちゃんだよ。お兄ちゃん、この子はみつちゃん  
っていうの。カガリの大親友なんだよ」

カガリの親友のみつちゃんは歳に不相応な落ち着きを持っていた。  
丁寧にお辞儀をすると嫌味のない笑顔を浮かべる。

ちよつとしたお嬢様に見えないこともないが、服装がTシャツにジ  
ーンズと何とも男らしいことが残念ながらそのイメージを相殺して  
いた。

まあこの山道を歩くのにはある意味正解と言える服装には違いない  
のだが。

「はじめましてマサキさん。私は九条レミと言います。マサキさん  
のことはりつちゃんに聞いてました」

「え？そうなのか、りつちゃん？」

「み、みつちゃん！それよりどうしたの？どっかいく途中？」

「どうしたの、っていうのはそっちのほうだよ・・・なんでマサキ  
さんびつしよりなの？可愛そう」

「あああつ、これはいいの大丈夫、お兄ちゃんびつしより好きなん  
だよねっ？」

びつしより好きになった覚えはないんだけどなあお兄ちゃん。

慌てふためくカガリの様子を見ながら微笑んでいるみつちゃん。ど  
うやらこれが二人の関係らしい。

「私は荒川の方に行くところ。昨日自転車が壊れちゃって、修理に

出してるからそれを取りにね」

「わー・・・大変だね・・・そうだ、今度はみっちゃんも一緒に遊ぼうよ。お兄ちゃんもいいよね？」

「ああ・・・みっちゃんがいいなら」

「わかりました。マサキさんには個人的に興味もあるのでいろいろと楽しみです・・・それじゃまたね、りっちゃん」

「ばいばいっ！」

すれ違った後もしばらく手を振り続けている二人を見て微笑ましい気分になってくる。

そういえばカガリの友達というのに初めて遭遇した気がする。十八年の人生で初、カガリの友達発見である。

みっちゃんを見送っているカガリの楽しそうな顔を見るだけで二人がとても仲良しである事が伺えた。

「いい子だな、みっちゃん」

「そりやもうすっごいいい子だよお！みっちゃんとは多分これからずっつと友達だね！」

「そっか・・・お姉ちゃんどっちがいい子だ？」

「お姉ちゃんは論外だよ」

論外だそうだ、ホムラ。

こうして川遊びが終わった午後、俺は一人客間で本を読んでいた。畳の上に寝転がり、座布団を折りたたんで枕代わりにして本を読む。午前中ははしゃぎすぎたせいで少し疲れた。そんな空気を読んでか、カガリは自室に引っ込んでしまった。

夏休みの宿題というやつがあるらしい。小学生も大変である。窓から吹き込んでくる風を受けているとゆっくりと瞼が重くなっていく。

「ふう……」

「おーっす、マサキいるかー？」

「……」

何故こう、静かな俺の一人の時間を狙い済ましたかのようにやってくるのか。

嫌々振り返ると予想通り、ホムラが襖を開いて立っていた。これ見よがしにため息をついたがそれも無視。

「どうした論外姉」

「……なんだからわからないけどすごく寂しい気分になっちゃったろ……責任とつてくれよ」

その責任はむしろあんたが妹に対して取れ。

相変わらずのラフな格好で挑発的な笑顔を浮かべている。体を起こして首を鳴らし、首をかしげた。

「どうした？何か用か？」

「ひどい〜カガリに対する態度と私に対する態度が余りに違いすぎる〜」

「いいから用件を言え用件を。あとくつついてくるな」

「別に用つてわけでもないんだけどさ。退屈してるんじゃないかな〜って、空気読んであげたわけよ」

「退屈どころかさっきまで平穏な時間を満喫していたところだよ・・・」

「そんなジジくさいこと言っていないで何か遊ぼうよ？脱衣マージャ〜んとかさ」

なんでオーソドックスな遊びの提案が脱衣マージャンなんだ。と、ツッコミたかったがそうするとさらに付け上がりそうなのであえてスルーすることにした。

俺が持ってきたいくつかの小説を手に取り、ページを捲りながら口を開く。

「そういえば親父の予定だけど、明日あたり時間があるから顔出せつてね」

「そうなのか？だったら少し早く東京に戻れそうだな」

「ふう〜ん、そんなに早く戻りたいか・・・カガリが泣いちゃうぞ〜」

「俺が居なくなってもカガリにはみっちゃんがいるから大丈夫だ」

「みつちゃん……なんじゃそりゃ？」

まるで覚えのない言葉が出たかのように……いや、実際その通りだったのだろう。『みつちゃん』を知らないらしいホムラは首をかしげ、目を丸くしていた。

そうなると俺もなんとさえいいのかわからず、曖昧に言葉を濁して話を進めた。

「そういえばホムラは大学ちゃんに通ってるのか？」

「ちゃんと、っていうのが私の中に基準と合致するか怪しいけど、まあちゃんとしてるよ」

苦笑しながら答えると思いついたように部屋を抜け出し、缶ビールを両手に戻ってきた。

「嫌な事思い出させないのもいい男の条件……そしてそれを忘れさせるのも、いい男の条件」

「だったら、酒に溺れないように見張ってるのもいい男の条件だな」

「あーもうはいはい、うだうだ言わない」

問答無用でブルタブを開く軽快な音が響いた。

むさぼるような勢いで一気にほぼ丸々一本ビールを飲み干し、何ともいえない幸福感あふれる表情でため息をついた。

「この瞬間のために生きてるわね……ってなんかのセリフであつたよね」

「知らんよ……」

しかしこれはチャンスかもしれない。カガリと行動していた間は忘れていた疑問を口にした。

「……ホムラ、どうして兄貴は居なくなっただと思っ？」

途端、ホムラの表情が変わる。余裕たっぷりの笑みはどこかえ消え去り、読めない平坦な表情を浮かべた。

「やっぱり気になるか……そりゃそうだ。納得行かなくて当然……  
……ってことだね」

ビールを口にしながらもどこか鋭くこちらの思考を見通すような目で俺を捉えている。

その姿は日常のだらけた彼女の態度からは連想しづらいもので、俺は思わず面食らってしまった。

それが彼女がどれだけこの件について真剣なのかを示していて、彼女もまた悩んでいることの証拠でもあった。

「私はここに来た直後、すぐにその話になるかと思っただけど……  
今まで我慢してたってことは、案外考えなしてっわけでもないんだ  
ね」

まさかカガリにこんなことを聞くわけにはいかない。カガリもまたこの件について悩み苦しんだ人間であり、出来れば彼女に笑って欲しいという俺の我侭もある。

ともあれ、この話題を真剣に話せるのはホムラしか今のところいない。そして今まで彼女と二人きりになる時間がたまたまなかった……  
・それだけのことだ。

座布団を敷きなおし、その上に座りテーブルを指先で叩く。

「どう考えても一年前、家を出て行く兄貴の様子はおかしかった。今になって思えばだが、それは間違いない。だからきつと俺はここに何かあるんだと思っていた・・・それは今に始まったことじゃない」

「でも一年、こうして機会があるのを待ってくれたのは私たちを信じてくれたからだよね」

その通りだ。

彼女たちは彼女たちなりに兄貴のことを探してくれたことだろう。だとすればそこにさらに兄貴はどうだのと割り込むのはあまり得策ではない。

俺にしかわからないこと、彼女たちにしかわからないことはあつただろう。ただそれでも俺はそこに介入することで話がこじれるのを恐れていた。

いや、元々俺はここまで兄貴が戻ってこないことになるとは思っていなかったのだ。失踪とは言えどうせすぐに戻ってくる・・・それくらいにしか考えていなかった。

しかし一年が経過しいよいよ何もしないわけにもいかなかった、というのが本音なのかもしれない。

一年前の事を知る術として力ガリを使うのは出来れば避けたいと思っていた。子供が背負うには重い事実の違いなく、彼女もそれを乗り越え今を生きている以上、わざわざ古傷を抉るようなことはしたくないからだ。

そこを言えばホムラは大人であり、兄貴とも懇意にしていたことから頼れると判断出来た。それに彼女はどうも俺が思っていた以上に兄貴の事を既に割り切れているようだった。

「ま、いいよ……ほとんどわかることは無いと思うけど、いい機会だからじゃんじゃん聞いてくれたまえ」

「では遠慮なく。兄貴が失踪した日、最後に兄貴を見たのは誰だ？」

「カガリだよ。カガリと一緒に遊びまわってたからね、丁度今日のマサキみたいに。でも途中で別れたんだ」

「別れた？」

「ああ。カガリを先に家に帰して、それっきり。みんなで探したけどまったく見当たらなかった」

それでカガリは気にしていたのだろう。となるとやはりカガリにこの話をしなかったのは正解。

しかしそうなる手がかりは全くないのか？カガリとその直前まで遊んでいたとしたら一体何があったのか？

「おかしな様子はなかったのか？」

「おかしいと言えば、マサキが来ないのがおかしいとは思ってたけどね。でも特別なことなんてそれくらいであとは例年通りだったよ」

「……………そうか」

予想はしていたものの期待していたような返答が得られず、少し落胆する。

肩を落とした俺の様子を見てホムラは苦笑しながら缶ビールを揺らした。

「そんな落ち込むなよ。頼むからマサキまで居なくなったりしないでくれよ」

「不吉な事を言うな……でも、そうか……そうだよな……  
・悪い、変な事を聞いて」

「いや、いいさ……なんなら明日親父にでも聞いてみればいい。  
あっちのほうは少しは詳しいだろ」

「そうだな……そうするよ」

こうなるともう叔父さんに聞くしかないだろう。

ホムラと別れ一人で庭先屋敷を後にする。

兄貴が消えた理由。それさえ判れば行動のしようがまだある。

しかし何がどうなってそういうことになったのかわからない以上  
手のうち用もない。

結局のところ俺一人に出来ることなど限りなく少ないという事実だ  
けが重く押し掛かってくる。

勿論最初からどうにかできるなんて思っっていなかった。

けれど……どうしたって納得行かない事実に変わりはない。

頭の中を無限にループする思考を振り切るように軽く頭を振る。

「どうもこんにちは」

背後からの声に振り向くとすぐ目の前に誰かの顔があった。

思わず驚いて飛びのくと男は肩を竦めて苦笑した。

一体何がどうなったのかわからないまま男を眺める。それは見間違  
いでもなんでもなく、昨日俺の事を眺めていた黒い影に他ならな  
かった。

その存在が頭の中からすっかり消え去っていた事もあり、突然目の

前に現れた事実には驚きを隠せない。

気を取り直し男を凝視する。サングラスを外して微笑むその顔は穏やかなものだが、引き攣るように頬をせりあげた笑顔が気味が悪い。サングラスの下、左目に更に漆黒の眼帯を留めていた男は目をうつすらと細め、笑顔で口を開いた。

「そんなに驚かないでくださいよ、傷つきます」

「・・・・・・・・・・・・・・・・なんだ、あんた・・・・・・・・何か用か？」

「んん・・・・・・・・警戒心丸出しですねえ・・・・・・・・まあ、そりゃあそうでしょうけど・・・・・・・・うん、至極真つ当なりアクションだと言えるでしょう」

なにやら一人で楽しそうに笑いながらぶつぶつと呟き、ネクタイを締め直しながら首を僅かに傾げる。

「安心してください、遠山マサキ君。私は貴方の敵ではない・・・・・・・・むしろ味方と呼べる存在なのですから」

「味方・・・・・・・・だと」

いや、それよりも何故俺の名前を知っているのか。

これで警戒しないやつがいたらそれは頭のネジがぶっ飛んでいるか狂気的なお人よしだろう。

すぐさま距離を取り、男をにらみつける。

「だから、そんなに警戒しないでくださいよ・・・・・・・・ふふっ、まあいいでしょう、最初はこんな事だろうと思っていましたし」

「これ以上頭のおかしい奴と口を利いている時間はない・・・さつさと消えてくれないか」

「想像以上に辛辣ですね・・・しかし貴方は私を頼らざるを得なくなる。お兄さんの事を探すのならね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

無言、無表情のまま動揺を心の奥底に押し込めた。

一体何が起きている？ 兄貴を探す？ こいつに頼る？ 俺が？

いや、何故それを知っている？ そうだ、まさかこいつ、一年前の関係者なのか・・・？

だとしてもこんな胡散臭い奴を信用するには到底至らない。冷静に考えれば兄貴の事はこの村の人間なら知っていてもおかしくはないし、毎年ここにやってきている俺の事もそうだ。確かに突然で驚きはしたものの、それほど異常な状況というわけでもない。

落ち着きを取り戻すとこの男の信用性は更に消滅した。一刻も早く会話を切り上げて屋敷に戻りたくなる。

歩き始めた俺の背中、振り返りもせず男は告げる。

「今日のところは早めにお休みになってくださいね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・？」

「お疲れでしょう・・・ねえ、色々と？」

その言葉が何を意味するのか、俺は一瞬わからなかった。

ただ脳裏をよぎったその可能性の不気味さに背筋が寒くなり、思わず振り返る。

そんな俺をよそに男は既に歩き始め、砂利道を一人歩いていた。思わず齒軋りする。砂利を蹴飛ばし、額を押さえた。

「くそつたれ……………」

なんなんだ、あいつ……………。

「つけてたのか…………俺の事を……………」

一体何のために…………？

真夏の日差しのせいか、シャツはひどく汗ばんでいた。

その気持ち悪さと言葉に出来ない不快感が胸をドロドロと渦巻き、俺を苛立たせる。

先ほどまでのどかで美しかったはずの景色が突然邪悪に変わってしまつたような錯覚すらある。

大きくため息をついて振り返ると屋敷からサンダルを履いた力ガリが走ってくるどころだった。

「おにーちゃん、夕飯は何がいい……………って、どうかしたの？」

「あ、ああ……………いや、何でもない」

頭を軽く振つてあの黒い影を振り払う。

脳裏にこびりつくようなあの笑顔がどうしても消し去れず、再びため息をついた。

それを勘違いしたのか、カガリは申し訳なさそうに俯きながら呟き始めた。

「やっぱり…………コウヤお兄ちゃんのこと、探してるの？」

凶星であること、そしてカガリにそれがわかって当然である事を思い出し、思わず言葉を失くした。

嘘をつくわけにはいかない。いや、嘘をつくようなことでも、ない……。

「ああ……そうだ」

「そっか……そうだよね……当たり前だよね……遊んでる場合なんかじゃ、なかったよね……ごめんね」

胸の前で組んだ指をもじもじと絡めながらカガリは頭を下げた。きつと彼女も彼女なりに俺に気を使っけてくれたのだろう。

それはそうだ……やっぱり忘れることなんか出来るはずがないんだ。俺も、カガリも、ホムラも。

「ねえ……カガリも手伝うよ？一緒にさがそ？」

「でも……」

「カガリ子供じゃないよ！それに、あの時一番一緒にいたのはカガリだもん、何か約に立てると思うんだ」

「……」

勿論それはその通りだった。

ホムラでも俺でもなく、カガリがあその時に一番近い人間。それを避けてはいつまでたつても必要なピースが揃わない。しかしそれあえて避けていたのも事実だ。

俺は彼女を巻き込みたくなかった。出来れば子供は忘れたままで居られればいいと思っていた。しかしそれではどうしようもない。

それにここまで言われてしまった以上、やはり無理に押し返すことも無意味なのだろう。

「……………わかった。でも、そんなに気負わなくていい。本当は俺も、納得したいだけなのかもしれない……………」

理解したいのかもしれない。受け入れたいのかもしれない。

兄貴はもうどこにもいないと。兄貴はもう戻ってこないのだと。

そのためにはきつとこんな儀式が必要なんだろう。納得するために、どこかにいるんじゃないかと、そんな希望を消して、過去にしてみようために。

そうだ、俺は兄貴のことを何らかの形で過去にしなければならぬ。見つけるにせよ、戻ってこないという事実を受け入れるにせよ。

どちらにせよ俺は、そうしなければいつまでたっても一年前のままなのだから。

「頼む力ガリ。俺に協力してくれ」

「もちろんだよっ！そうと決まれば今日はおいしいもの食べて早く寝なきゃねっ！」

元気よく走っていく力ガリの後姿に少しだけ安堵する。

もしかしたら一番ショックを受けているのは俺なのかもしれない。だとすればなんと女々しく……………情けないお兄ちゃんだ。

こうして本当の意味で俺の一週間が始まった。

そしてそれが、俺が選んでしまった最初の過ちだった。

Side : A Day 3 - 困惑 -

少しかけ状況を整理して見る。

まず兄貴は間違いなく一年前、この小瀬に居た。

カガリたちと共に例年通りの休日を通り過ぎていた。

そしてカガリと共に行動していた所、突然居なくなってしまった。

失踪。当然それをほうって置くわけ無く、カガリたちも町の人々

も兄貴を探した。

しかし兄貴は見つからなかった。その報告が来てようやく俺は兄貴が失踪した事実を知る。

その後一年が経過しても兄貴は戻ってくるどころか手がかり一つ痕跡一つ存在せず、ただ時間だけが流れた。

ホムラもカガリも知らないという兄貴の身に一体何が起きたのか俺が知る由もない。

今もしも手元に手がかりが一つでもあるとすれば、あの黒い男の事だろう。

あの男の台詞一つ一つが兄貴との関係性を匂わせている。

いや、あちらもそのつもりで口を利いていたのだろう。だとしたら一体何が目的なのか。何を知っているのか……。

話を変えよう。

八神一族はこの小瀬では名家であり、権力も当然持ち合わせている。その当主である男、八神カゲロウ……つまり俺の叔父さんに該当する人物はおおよそこの町で起こるほとんどの事件を耳にしているはずだ。

極端な話彼が知らないことはほぼ誰も知らないと言っても過言ではないほどに。

だからこそ彼に尋ねるのが最も手っ取り早い方法であり、最終手段でもある。

カゲロウはこの小瀬には似使わないほど巨大な病院の院長でもある。所謂サナトリウムであるそこは、都会などから送られてくる末期の患者を預かる場所だ。

カゲロウ自身優秀な医師であり、兄貴も尊敬していた人物。だからこそ信頼は置ける。

なんにせよ一年前の事件を調べると決めた以上、後戻りはできないし躊躇する必要もない。

元々の旅の目的にも合致するカゲロウ叔父さんとの接触。三日目はそこから始まった。

Side : A Day 3 - 困惑 -

屋敷を出て山道を登ること一時間。ようやく叔父さんが勤める病院へ到着した。

久々に見る白亜の建造物に懐かしさと同時に苦い思い出がよみがえる。

「昔は注射が嫌でここに来るのを嫌がったっけ……」

何年も前、随分ともう昔の話だが、その時は兄貴に説得されてつれてこられた気がする。

お目当ての人物はあっさりと見つかった。庭先にある花壇に水を上げていている着物姿の男性。彼こそが八神カゲロウ、俺の叔父さんであ

る。

「叔父さん、お久しぶりです」

「おお、マサキ君じゃないか・・・いやあ、久しいね・・・元気にしていたかい」

白髪交じりの髪をオールバックで固め、いついかなる時も着物を用する変わり者。腕を組んで笑うその姿は威圧感は存在せず、親しみやすさがあふれている。

昔から懇意にしてもらっているだけあり、彼との関係は良好だ。昔と変わらない豪快な笑顔で俺を迎えてくれた。

「見ての通り健康ですが、一年サボっていたので健康診断を受けに来ました」

「ホムラから聞いていているよ。まあさっさと済ませてしまおうか」

よほど丁寧な世話しているのだろう。華麗に咲き誇った花たちが雲を煌かせている。

如雨露を片手に歩く姿はどうにも病院の院長というイメージから離れているが、彼らしいといえば彼らしい。

玄関でスリッパに履き変えると全く人とすれ違わない廊下を歩き、病院内の一室に入る。

そこは所謂診察室のようだったが、机の上に設置された魔法瓶を使い急須にお湯を入れると湯のみを持ち出してくる。

「まあ掛けてくれ。お茶でも飲もうじゃないか」

「ありがとうございます・・・でも検査はいいんですか？」

「いいもなにも、君はいたって健康だろう・・・それとも何か具合の悪いところでもあるのかね？」

「あ、いや、それは大丈夫です。また注射を打たれるかと思っただので少し安心しました」

「はっはっはっは！相変わらずだな君は・・・そら、私のお気に入りの一杯だ、試してみてくださいたまえ」

「頂きます」

差し出された湯のみを口につける。爽やかな苦味と緑茶の香りが口いっぱい広がった。

「茶道でも嗜んでいるんですか？」

「はっはっは、お世辞がうまいね。なあに、葉がいいだけさ」

二人して湯のみを傾ける時間が続いた。お茶が半分ほど減る頃を見計らって俺は口を開く。

「今日は叔父さんに聞きたいことがあって来たんです」

「ふむ・・・コウヤ君の事かね」

ホムラ同様全てお見通しだったのか、叔父さんはまじめな顔でそう言った。

頷き、湯のみを置いて言葉を続ける。

「一年前に兄貴を探してくれたのも叔父さんなんですよな？」

「そうだな。一年前彼が失踪した時、確かに私は指揮を執ったよ。だが、だからといって収穫は無かったが」

「何でもいいんです、何かこう、手がかりになるようなこと……ありませんか？」

困ったように眉を潜め、腕を組んで渋い表情を浮かべる叔父さん。確かに叔父さんにしてみればもう一年も前の事、しかも当時出来ることはやりつくしているはずの出来事だ。

今更一年経ってやってきた俺があだこうだ聞いてもそれは迷惑でしかないのかもしれない。

それでも律儀に考えてくれているところを見ると、おじさんもやはり色々引っかかっているのかもしれない。しばらくすると叔父さんは渋々話してくれた。

「実は一年前にあった事件は一つではないんだよ」

「一つではない……というと？」

「いや、一つかもしれない……だからこそあまり君には教えたくなかったんだがな……」

さらに口ごもる叔父さんの姿に俺までなんだか息苦しくなってくる。

「一年前の事だ。荒川ではある事件が起きていた……まあ、住民なら誰でも知っていることだがな」

「ある事件……？」

「ああ……連続殺人事件だ」

今から一年前の夏。

小瀬を含む荒川一帯で連続殺人事件が発生した。

死者は三名。いずれも荒川本町付近の川原で発見されたと言う。

被害者に共通点が無い事、そして死体の状態から通り魔的犯行と推測され、一時期騒然となった。

「無論、今となつては誰も話題にしたがらないがね。子供たちの間では噂になつたりしているかもしれんが」

死体の状態……それがこの事件の特徴だと言える。

死体はどれもバラバラに解体されていた。切断面は強引に引きちぎられたように不揃いで、刃物で切断したとは考えにくい。何か鈍器のようなもので叩き斬ったか、強烈な力のある工具で引きちぎったとされている。

そして何より、死体のパーツが全て発見されていない、ということがこの事件をただの殺人事件ではなく猟奇殺人事件という異常な名前に引き上げていた。

「この事件が発覚したのは、殺人が行われたと思われる日時から随分と時間が経過してからのことだった。その殺人が起きたとされる期間、コウヤ君は屋敷に遊びに来ていたからね……」

「そんな……まさか兄貴も……?」

「あまり、その可能性は考えたくはないがね。だからこそ君にそれを伝えるべきかどうか悩むところだった」



意気消沈しての帰り道は何ともいえない空しさがあった。兄貴がもう戻らないかもしれないという思いは強くなり、同時に何故？という思いも強くなっていた。知りた。兄貴の身に何が起きたのか。しかし、それを確かめた時・・・俺はどうなってしまふのだろう。

「お兄ちゃんどうだった？大丈夫？」

玄関で俺を出迎えてくれたカガリは心配そうに上目遣いにそう言った。その小さな頭に手を乗せ軽く撫でるとため息をついて首を横に振った。

「手がかりはつかめなかったよ・・・」

「そっか・・・そうなんだ・・・」

玄関先に座り、その先に浮かぶ景色を見つめる。沈みきつた気分が心を染めていく中、カガリは意を決したように何度も頷き、

「お兄ちゃん・・・これから一緒にお出かけしない？」

「また川か？」

「違うよ。あの日、コウヤお兄ちゃんと一緒に見て回った場所を一緒に歩いてみるの。そしたら何かわかるんじゃないかな？」

それはある意味名案であり、今の俺に出来る目前の手段でもあった。あの日何が起きたのか。それを知るには実際に兄貴の視点に立ってそれを確認するしかない。

勿論それが意味を成すのかどうかはわからない。ただ今の俺にとってそれは僅かな希望のように思えた。

早速俺たちは屋敷を出ることにした。まず最初に向かったのは昨日も訪れた例の川原だ。

小瀬から下流に向かい続いているそれは殺人の発覚した場所でもある。つまりこの下流で死体が見つかったのだ。

そう考えると急にその場所そのものが不気味に思えてくる。そしてそこへ兄貴も訪れていた。

「コウヤお兄ちゃんがってうよりは、カガリが誘ったんだけどね・・・昨日みたいに」

「それで、兄貴はどうだった？」

「普通だったよ？一緒に水遊びして、屋敷に一度戻ったの」

忠実に行動を再現するため俺たちは一度屋敷に戻った。そこで兄貴たちは食事を取り、午後は荒川の方に出かけたのだという。徒歩で畑道を歩き、小瀬と荒川を繋ぐトンネルを通過する。

やがて一日ぶりに荒川に出ると、兄貴はここでカガリにデザートをご馳走すると言って喫茶店に向かった。

そこでカガリにパフェをご馳走して、その後町を無意味に歩き回った。

「パフェを食べて、コウヤお兄ちゃんはコーヒー飲んでたよ。それでお店を出てしばらくおしゃべりしながらうろつろして・・・あつ」

「どうした？」

「その後コウヤお兄ちゃんが『図書館はないか？』っていうから、役場の隣にある図書館に案内したんだけど」

「図書館・・・？」

本好きな兄貴らしいといえば兄貴らしいのだが。

町役場そのものが小さいだけあり、図書館も大きいとはお世辞にも  
いえないものだった。

しかしこの田舎にしてはなかなかの蔵書量であり、中に入るときち  
んとエアコンが効いていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・？」

何か、先ほどから違和感を覚える。

しかしその正体がさっぱりわからず、思い過ぎだと考え本棚を眺  
めた。

「それで兄貴はどうしてたんだ？」

「うーん・・・・・・・・ごめんね、流石にそこまでは・・・・・・・・カガ  
リ暇だったから漫画読んでたし・・・」

そりゃそうだ。あの兄貴の読む本だ、余程子供には退屈な類だろう。  
ここまでできて医学書をあさっていたのだとしたら既に本人が病的だ  
と思うが・・・・・・・・。

「わかった、少し調べてみるからカガリはここで漫画でも読んでい

てくれないか？」

「え……？あ、うん……わかった」

「ん？嫌か？」

「嫌じゃないよっ！？でも……その……あの……」

妙に歯切れが悪いカガリの様子に首を傾げていると、

丁度図書館に入ってきた見覚えのある少女とばったり目が合った。

「あれ？マサキさんにりっちゃん……何してるの？」

「みっちゃん!？」

昨日と同じような男っぽい服装、今日は長い髪を左右で結んでいる。慌てるカガリの元に早足で近づくと何故かため息を付いた。

「……りっちゃん？」

「はっ！」「ごめんね……？」

二人の会話の要領が全くつかめない俺はただ首を傾げる。そんな俺の様子にみっちゃんは笑顔でカガリの手を取り、

「私たちはそこでお話しているので、マサキさんはどうぞお構いな  
く」

「あ……ああ？」

二人が奥のベンチに向かっっていくのを見送り、ぼりぼりと頭を掻く。何がどうなっているのかはさっぱりだが、まあみっちゃんが居ればカガリも退屈しないで済むだろう。

さて、この場所に仮に手がかりがあるとして・・・一体それは何なのか？どこにあるのか？それが問題だ。

顎に手を当て目を細める。それにしてもこんな本の海のような場所から手がかりを漁れというのも随分と無茶な話だが。

ふとカガリたちの方に視線を向けると二人はなにやら内緒話をしてるようだった。見ているとまずいかと思ひ視線を戻す。

「さてと・・・まあざっと見て回ってみるか」

幸いこの図書館そのものはそんなに広くはないのでそれ自体に苦労は無かった。

しかしただ歩き回ったとしても手がかりの方から出てきてくれるはずもなく、当然収穫はなかった。

仕方がないので司書の女性に声をかけることにするが、どうにも司書の反応は鈍い。

「一年も前の事ですと、ちょっと・・・」

「そうですか・・・本当に些細な事でも構わないんですが」

「申し訳ございません」

いかにも迷惑そうな対応が少し頭に來たが、まあ確かに迷惑だろうと引き下がった。

さてこうなってくるとこの図書館に手がかりはないような気がしてくる。実際ないのかもしれない。

兄貴もただ単に本が好きだからここに來たという可能性もある。だ

とすれば俺のやっていることは大分的外れということになる。  
兄貴自身から行きたいと言った場所だからこそ何か手がかりがある  
かとも考えたのだが……。

「ふー……ここは涼しくていいな……」

と、呟きながら入ってきた人物とすれ違い、同時に振り返った。  
コートを肩から下げ、胸元を大きく開いたワイシャツをつまんで仰  
いでいる長身の男。

確か二日前、電車の中で見かけた。向こうもそれに気づいたのか振  
り返り、爽やかな笑顔を浮かべた。

「奇遇だな……まさかこんなところで遭遇するとは」

「驚きました。世の中案外狭いものですね」

「かもな……しかしこの町は本当に田舎だな……正直喫茶店  
とココ以外出入りしたくない気分だぜ」

苦笑しながら窓の向こうの強い日差しを恨めしげに眺めている。確  
かにそれは同感だ。

朝と夜はとてまずごしやすいのが……昼の暑さはたまらない。と  
は言え都会よりはましなのだが。

その黒い衣装がどこか昨日遭遇した男と似ている気がしたが、彼自  
身から薄気味悪い雰囲気は感じられずそれどころかはきはきとした  
気力すら伝わってくるのだから随分とまあ違うものである。

「図書館に来るような方には見えませんが、どうかしたんですか？」

「何気に言うねえ……ま、確かに活字は苦手だ。見ていると眠

くなるからな。用ってわけでもないが、まあ待ち合わせ序に涼んでいこうと思つてな。これぞ冷やかし」

どこから突つ込めばいいのかわからなかったので黙っていることにした。

本人は何が面白かったのかわからないが軽快に笑い飛ばしているので俺もとりあえず付き合いで笑つておいた。

「そういうそつちはどうなんだ？何か探し物か？」

「まあ、本は嫌いではありませんからね」

「そうか・・・まあそんな顔してるな。読書の邪魔して悪かったな」

「いや、今日は読書目当てではないので・・・あ、そうだ」

何故そんなことを口走つたのかはわからない。ただ何となく聞いてみたいと思つてしまったのだ。

「一年前の殺人事件について、何かご存知ありませんか？」

ほぼ初対面の人間、しかも明らかにこの町の外から来た男に対してそんな質問をした意味はわからない。

しかし男にとってその言葉は意味を持つものだったのか、腕を組んで首を横に振った。

「全く知らないわけじゃないが、悪い事は言わねえからその事はあんまり調べるな」

「調べるなって・・・どういう事ですか？」

「そのままの意味さ。素人が調べたところで判ることもないし、判ったところでどうなることでもないだろう」

それは確かに彼の言うとおりだった。だからこそ俺はいまその手段につまりこんなわけのわからないところにいる。

一年前の事件について何か知っているという彼。そして彼はそれを調べるなど言う。

その言葉の意図は想像するに、まだつかまっていない犯人とやらが関係しているのだろう。

そうだ。殺人事件を調べてはいけない理由なんて決まっている。危険があるか、知ってはいけない何かがあるか。

犯人が捕まっていない以上、確かにまだ脅威は拭い去れてはいないのだろう。だとすればその忠告はあながち的外れでもないが、町の外の人間であるはずの彼がなぜそんな事を知っているのか・・・疑問は尽きない。

「ま、お遊びは程ほどにしておけよ少年。じゃあな」

俺の肩を叩き、男は奥へ去っていった。もしかしたら何か手がかりがあるかもしれないとも思ったのだが、その背中に声をかけることは何故か出来なかった。

危険があるからこそ、まだそれが拭い去れないからこそ、叔父さんもホムラもいい顔をしなかったのかもしれない。

何はともあれ彼のことは置いておくとして、これで振り出しに戻ってしまった・・・そう考えた直後だった。

彼が去っていった方の床に何かが落ちていた。それは明らかに先ほど彼が落としたもの・・・恐らくは上着のポケットにでも入っていたのだろう・・・だった。

拾い上げてみると、それは随分と古い写真だった。しかし俺はその

写真に驚きを隠せない。

「これは……カガリ？」

写真は八神の屋敷をバックに取られていた。屋敷の前には四人の人間が立っており、それぞれが笑顔でファインダーに向かい合っていた。

その左側には美しい女性が、右端には……恐らくカゲロウ叔父さんが。そして二人の間に二人の女の子が。

カゲロウ叔父さんの若さにも驚いたが、子供二人が余りに幼いところを見ると既に十年以上の写真であることが伺える。

左端に立つ女性は今のホムラに似ており、彼女が恐らくカゲロウ叔父さんの妻であり、カガリとホムラの母親なのだろう。

八神家の母親は随分と前に家を出て行方不明になったと聞いている。行方不明。行方不明……？

これは何かの偶然なのだろうか？行方不明……つまり失踪。その言葉に思わず背筋がぞつとする。

何だ？何が起きている？何故こんなにも……こんなにも悪寒がするの。

息を呑む。何度も何度も画面を凝視する。八神家の母。妻。失踪した。行方不明になった。今はもう居ない。

失踪？何故失踪したのだろうか？その理由を俺は知らない。カガリたちは知っているのだろうか？

いや、待て。なんだこの違和感は。何か大事な事を見落としている……俺はこの写真をおかしいと感じている。

しかしその違和感の正体がかめめない。なんだかもやもやする感覚。何かを見落としている、そんな焦燥感。

写真の裏を見る。そこには『家族全員で』と綺麗なボールペンの字が書かれていた。

日付はない。だからこれがいつのものかはわからない。しかし写真

に写っている人物の年齢で大体の予想は・・・年齢？

「え・・・・・・・・・・？」

違和感の正体が判明した時、我が目を疑った。

ホームラは外見からしてまだ10歳に満たない子供だろう。今の力ガリよりも一回り小さい。

そして・・・問題はその力ガリだ。その外見は10歳ちょっと・・・つまり今のそれと大差がないのである。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・？」

混乱する。頭の中がぐるぐる回っている。

大差がないとはどういうことだ？力ガリは確かに昔は小さかったし今は大きくなった。

昔に比べ背丈も伸びたし、きちんと小学校の学年も上がっているはずだ？

小学校の学年？そんなの確かめた事はない。しかし確かめるまでもないはずだ。なぜなら学校に通っているのだから。

通っている？夏休みにしか来ていない俺が何を根拠に言えるのか？それより何故ホームラより力ガリのほうが大きい？

全くの別人なのか？いやそんなことはない、似すぎている。しかしこれは・・・若返ったとでもいうのか？

自分の中にある一年後との力ガリの成長の記憶と写真に写った停止している力ガリの姿とが頭の中でかみ合わず猛烈な違和感を醸し出している。

冷や汗を拭い、慌ててその写真をポケットに突っ込んだ。先ほどの男はのんきにあくびをしながら本棚を眺めている。

何故あの男がこんなものを持っているのか？そしてこれは何なのか？問い詰めなければならぬのに何故か足がすくんで動かない。

何故なんだ？八神の母親の失踪。一年前の殺人事件。写真の中の力ガリ。兄貴の失踪。

全てが無関係とは思えない。何故なんだ？俺は一体何を疑っているのか？疑っている？

そうだ、何かおかしい。何か大事な事を見落としている気がする。それが判らず更に困惑が広がっていく。

何だ？何かおかしい？何を見落としている？冷静にならない頭が恨めしい。落ち着け。

「くそっ……兄貴……どういことなんだ……？」

瞳を閉じる。俺は違和感の正体がわからないほど馬鹿なのか？

額を押さえながらどれだけ混乱していたのだろう。しばらくすると体が揺さぶられていることに気づいた。

ゆっくりを目を開けるとそこには力ガリとみっちゃん不安そうに俺を見上げていた。

「大丈夫お兄ちゃん……？具合悪いの？」

「あ……」

思わず言葉が出なくなる。しかし気を取り直し、出来る限り冷静を装う。

「大丈夫だ。何でもない……」

視線だけで男の姿を探したが、待ち人が来る時間になったのか、男の姿はいつの間にか消えていた。

言及できなかったという残念な思いとわけのわからない真実を知らなくて済んだという安堵が同時に胸に広がっていく。

「マサキさん、具合が悪いのなら早く帰って休んだ方がいいのでは？」

「心配は要らない。それよりここはもういい・・・次へ行こう」

「だったら私も一緒に行つていいでしょうか？昨日の約束もありますし」

遊びというわけではないのだが・・・まあ特に構わないだろう。傍から見れば散歩のようなものだろうし。

こうしてみつちゃんを加え探索は続いた。兄貴の行動はその後脈絡もなく、手がかりになりそうなものもなかった。

みつちゃんは自転車で来たらしく、わざわざ自転車を押しながら俺たちの隣を歩いていく。

みつちゃんと話している間のカガリは俺と居る時ともまた違い、心を開いているのか屈託のない笑顔を浮かべている。

考えられない。このカガリと写真のカガリにどんな関係があるのか。何か、関係しているのか。

しかしいつまでもそんな気分で居るわけにもいかない。幸いみつちゃんとかガリの明るい会話は鬱屈とした気分を吹き飛ばすには丁度いいBGMだった。

「マサキさんの事は嫌ってくらいりつちゃんに聞かされていましたが、想像以上に大きいですね」

「そうか？まあ平均よりは高いが」

「それにちょっと・・・いえ、かなりカッコイイです。これはりつちゃんが好きになつちゃう気持ちもわかるなあ」

「ちょーっ！っ！っ！みっちゃん何いってんの！！意味わかんないからっ！！！！」

「そんなに恥ずかしがることでもないんじゃない？勿論、お兄ちゃんとして、だよな？」

「え？あ、あゝ．．．うんうん、そうだね、うん、そうだよ」

コロコロ表情を変えるカガリを眺めながら微笑むみっちゃんはどう見てもカガリで遊んでいるようにしか見えない。

「みっちゃんはカガリと同じ年なのか？」

「はい、十二歳です。でも誕生日は私の方が早いので、多少はお姉さんですが」

そんな些細な差を名言されなくてもどちらにせよ君のほうが年上に見えるが。

しかしいつまでもみっちゃんと一緒に居ていいものだろうか？カガリが退屈しないで済むのはありがたいが、今やっているのは曲りなりにも殺人事件の調査だ。小学生二人を連れてやる作業ではない気がする。

悩みながら歩いているとついには荒川を一周してしまった。トンネルの前で立ち尽くし、次の行動を考える。

「これで全部か？」

「え？あ、うん．．．全部全部」

判りやすい嘘だった。カガリは余りに正直すぎる。少しカンが鋭い人間ならば直ぐにでも気づくだろう。

だから俺は何も言わずただカガリを見つめ続ける。じっと。無言で凝視。ただひたすらに。

両手を振ってNOの姿勢を示すカガリだったが、俺から目を逸らせずついには奇妙ならめっこが始まった。

しばらくそうしてカガリと俺のにらみ合いは続き、勝負はあっさりと決着した。

「うゝ……あと一箇所あるよ……」

「どうしてわざわざ嘘ついたんだ？」

「だって……」

カガリなりに理由があったようだが、黙っていられては俺もわからない。

腕を組んで再びカガリを見つめっているとみっちゃんが俺たちの間に割り込んできた。

「いいじゃないですか。マサキさんたちが何をしているのかはわからないけど、りっちゃんは無意味に嘘をつくような子じゃありませんから」

それは俺もわかっている。だからこそその理由というやつが知りたいわけだが。

しかし本人が言いたがらない以上それを言及したところで無意味だろう。カガリはこれでかなり頑固だ。

ため息を付いて頷くとカガリは申し訳なさそうに「ごめんね？」と呟いた。

カガリが言う最後の一箇所は屋敷の裏、病院へと続く道を更に真っ直ぐ進んだ場所にあった。

そこは山の頂上付近でもあり、徒歩で行くにはあまりに過酷だったが、カガリは平然と進んでいく。

兄貴もこうして今の俺のようにバテたことだろう。そして以外なのはみっちゃんは予想外に体力がないことだった。

「というよりは、りっちゃんが元気すぎるだけです」

と、拗ねながら少女は言った。

何はともあれ俺たちがたどり着いたのは一面に広がる草原、そして湖だった。

その景色はちよつとした現実離れの錯覚を起こすほど美しく、この今までの人生で一度も拝んだ事のない小瀬の姿でもあった。

湖の畔まで駆けていくカガリを追い、みっちゃんと肩を並べて歩く。

「マサキさんはこのことご存知でしたか？」

「いや……毎年来ていたはずだけど知らなかったな」

「当然ですね。ここはこんな山奥ですし、所謂穴場ですから。地元民でも滅多に近づきませんしね」

水遊びがしたいのなら川のほうが気軽ということだろうか。

それにしてもほとんど人の手が加わっていないらしいその湖の透明度は高く、底の様子すら明瞭に認識する事が出来る。

吹き抜ける涼しい夏の風が汗ばんだ肌に心地よく、思わず日差しに目を細める。

「でも不思議だな……どうして誰も居ないんだ？ちょっとした観光名所になつていてもおかしく無いと思うが」

「さあ、どうしてでしょうね」

俺の質問をはぐらかしたみっちゃんはカガリのところまで駆けていく。

二人が湖畔で駆ける様子を眺めながら、一年前兄貴が見たという景色に感慨深くなる。

兄貴はここを最後に消息を絶った。つまりいわば兄貴が存在したと確実に言える最後の場所だ。

続いているとしたらこの先……ここで兄貴は何を見て何を考え何に巻き込まれたのだろうか。

「それでカガリ……この後どうなつたんだ？」

「え？あ、うん……あとは普通に屋敷に戻つたよ」

「……ここにはどうして来ることになつたんだ？」

「それは……コウヤお兄ちゃんが最後に見ておきたいからって」

最後に見ておきたいから？

それじゃあここが最初から一番の手がかりじゃないか。何故今まで黙っていたんだ。

じつとカガリを見つめると視線から逃げるように後ずさりする。

「……………ふう……まあいい、半日無駄に使ったが……………ここが最終地点か」

周囲を見渡す。改めてこの場所を考察することにした。

湖はそれほど大きくはない。直径は最大部分で2 Km程。円形に近いがそれは当然均一ではない。

中央部分には陸地があり、木々が生い茂っている。

カルデラ湖、というものなのだろう。陥没した火山のくぼみに溜まった雨水などで形成された湖。

つまるところ淡水。外部と繋がっている様子はないので魚の姿も見当たらない。

特に特別と言える部分もない、ただの湖だ。兄貴が来たいといったのはただ景色が綺麗だからという理由かもしれない。

いや、しかしやはりここには何かあるのだろう。兄貴は俺と毎年行動を共にしていたはずだし、この存在だって兄貴が知っているはずがないのだ。

だとしたら兄貴がわざわざここを知り、そして最後にここを訪れた理由が何かあるはずだ。

腕を組んでしばらく湖を眺めていると二人が戻ってきた。

「マサキさん、湖に来たかったんですか？」

「まあそんなところだ……だが、意味は無かったようだな」

深くため息を付くと同時、背後に何者かの気配を感じて振り返る。

「……………まさかとは思ったが……またあんたか」

そこには昨日も遭遇した影のような男が立っていた。あまりに予想通りすぎて追加のため息が漏れる。

いかにも楽しそうに低く笑い声を上げ、目を細める男。俺はその距離を崩さないまま力ガリとみっちゃんに告げる。

「俺はここまででいい。先に戻っていてくれ」

「え……………」

律儀にも男は俺たちの会話が終わるのを待っていてくれた。ポケットに手を突っ込んだまま長い前髪の間から光るぎらぎらとした瞳で俺を見つめている。

あくまで標的は俺、ということらしい。それにどうせまたずつつけていたのだろう、もしかしたら今までの違和感の正体もこいつなのかもしれない。

何はともあれカガリたちに危害を加える、ということはなさそうだ。そんな確信を踏まえ、俺はカガリの肩を叩く。

「直ぐに戻る」

「……………やだ。カガリも一緒にいる」

「いいから戻っていてくれ」

「やだあつ！！！」

突然叫び声を上げてしがみ付いて来たカガリに姿勢を崩し、慌ててそれを抱きとめる。

ぎゅっときつく掴んだシャツがシワを作り、大きな瞳が涙で潤んでいた。

「だから嫌だったのに……………マサキお兄ちゃんも、コウヤお兄ちゃんみたいになっちゃっうよ！！！」

「……………」

そこで俺はようやく気づく。  
カガリにしてみれば、一年前と同じことを繰り返すのは恐怖の再来でしかなかった。

だから、この場所に俺を連れてきたくなかったのだ。しかしそれを勇気を出して俺を導いてくれた。

だというのに俺は、全く一年前の兄貴と同じ事をカガリに言っってしまったのだ。

小さな肩が必死に俺を心配してくれていた事実胸を打たれる。

少女が嘘についてまで守りたかったのは他でもない……この俺だった。

「……………すまない。みっちゃん、こいつを頼む」

「おにいちゃんっ!」

「大丈夫だ。それに、元々こいつとは一度じっくり話し合う必要がある」

「ふふっ、大丈夫ですよお嬢さん……私は彼に何もしませんよ。安心してください」

初めて口を開いた男をカガリは鋭い目つきでにらみつけていた。

その瞳も、カガリという少女の敵意も、俺にとっては始めてみるものであり……驚きを隠せない。

「おまえ……何かしてみろ……………絶対に殺してやるからな」

物騒な言葉を呟いたカガリ。肩を竦める男の仕草は了解というサインだった。

カガリの手を取るとみっちゃんは困ったような表情で俺を見上げる。

「すまない、巻き込んでしまった」

「構いません。けれどマサキさんもきちんと戻ってきてください。・  
りっちゃんが悲しみますから」

「わかっている」

俺は兄貴の二の舞にはならない。

こいつが何であれ、俺は絶対に戻って見せる。

カガリの手を引いてみっちゃんが走っていく。

名残惜しそうに俺を見ているカガリの視線を振り切り、俺は一步前に歩み出た。

「ククツ・・・宜しいのですか？私なんかと二人きりになってしまつて」

「子供をまき沿いにするよりはマシだ・・・それに、あんたは俺の『味方』なんだろう？」

「ええ、そうですね。ふふ、人間ならば自分の言葉には責任を持たなくてはなりませんね。特に初対面の人間が信頼を勝ち取るには大事なプロセスです・・・さて、何から済ませましょうか？私の用件からか、それとも貴方からか」

男は相変わらず顔面にへばりついているかのごとく笑顔を維持している。俺は目を細め、男を観察する。

やはりどうしてもこいつは相容れない存在だとわかる。生理的に受け付けられないのだ。だからといってこいつが俺に対して友好的ではな

いかと言えばその限りではない。とは言え俺は俺なりにこいつを試す必要がある。

「俺からだ。まず第一に、お前は殺人鬼か？」

俺の質問に目を丸くした男はぷるぷると肩を震わせながら手を振った。

「まさか！何故私が人殺しなんてしなくてはならないんですか？むしろ逆です」

やはり。この男はなんであれ俺に危害を加えるつもりはない。

そもそも一日中付回していたのなら俺がそれに気づかない時点でいくらでも俺に何かするチャンスはあった。

それでも何もしない時点で俺を無条件にどうこうするということはありえないだろう。

「第二、お前は俺に協力する気があるか？」

「それは答えに詰まりますね。協力するという言葉がギブアンドテイクという関係を指すのであればYESでしょう」

「やっぱりか……で、俺に何をさせたい」

俺を付回し、何もしない以上その目的は俺自身に何かをさせることに他ならない。

全身を駆け巡っていた警戒心を少しだけ緩める。その目的が達成すれば俺に牙をむく可能性はあるが、逆に言えばそれまでは安全だと考えられる。

ポケットに手を入れたため息を付く。そんな俺の動作に男は腕を組み、

細いシルエツトをさらに細めていく。  
長い手足で自らの体を抱く様に立つと今まで以上の薄気味悪い笑顔を浮かべた・・・が、まあこれは慣れだろう。

「話が早くて助かります。貴方が居なくては私の計画は即座に頓挫してしまいますからねえ・・・」

「だったら少しはご機嫌を取ることだな。そんな態度で毎度現れたら俺も考えを変えるかもしれない」

「それは失敬・・・次からは正面からお訪ねしますよ・・・フフツ」

男の名は高山。簡易な自己紹介だったのでそれしか分からなかった。向こうは完全に俺のことを熟知しているのに俺はこいつのことを知らないのだから随分とアドバンテージがあると考えたほうがいいだろう。

彼は一年前の殺人事件の真相を追っているという。それがどこまで信用できるかはともかく、一応の目的は俺と合致していた。

男二人、湖畔に腰掛ける。その囃はあまり客観的には認識したくないが、まあ仕方がない。

「さて、もう少し貴方の考えが聞きたいところですね。私の目的にも伴う事ですから、包み隠さず話してくださいね」

「俺だけが喋るのはフェアじゃないだろ。どちらが先に話すか・・・それだけで優位は変わる」

俺が自分の意見や今後の行動を話すことはこいつにその状況を教えることに他ならない。

そうしたうかつな行動により奴の中の目的が達成された時、俺の安

全性は消滅する。

つまりここは究極なまでに身長に、この正体不明の男から情報を収集しつつ、うまくやり過ぎす必要があるのだ。

「確かにそれはアンフェアですね。尤も、私は貴方に何かするつもりはありませんから無関係ですが」

「信用できるかどうかとも無関係だ。まずお前は何者か・・・そこから話してもらおう」

「私は刑事です」

「嘘つけ・・・そんな怪しい刑事がいてたまるか」

「本当です・・・ほら」

それが本物かどうかは俺には判断出来ないが、高山が手にしていたのは警察手帳だった。

もしそれが本当ならばこの男は警察で、本当に殺人事件を追っているのかもしれない。

だとしたらこの怪しさはなんとかしたほうがいい。刑事が捕まっていたらシャレにならない。

「安心してください、本物ですよ・・・疑り深い人間は嫌いではありませんが、行き過ぎると疲れるだけですよ」

「わかった・・・あんたが刑事なのはいいとして、一年前の事件を追っているっっているのは？」

「勿論貴方もご存知の通り、一年前の連続猟奇殺人事件についてで

す」

話の大筋はこうだ。

一年前、連続猟奇殺人事件が起こった当初から高山は事件を捜査していた。

しかし犯人が見つからないどころか検討もつかないまま捜査は中断。現在も全く行われていないわけではないが、ぱったりと事件が止まってしまった事、手がかりが一切存在しないことからほぼ打ち切り状態なのだという。

そんな中高山は一人でこの一年、事件を調べてきた。そこで丁度彼の目的に沿う人物として都合よく俺が現れた。

「つまりは捜査に協力していただきたいと、ただそれだけのことですよ」

「……………それで、兄貴のことは？知ってるんだろ？」

「勿論。一年前に失踪したとなれば事件を無関係とは思えませんしね…………直前までの彼の行動まで頭に叩き込んであります。勿論貴方との関係性も聞き込みであっさり判明しましたよ…………貴方わりと有名人なんですよ、ウフフフフ」

確かに滅多に都会から人が来る事のない町だ、それはそうだろう。

しかも地主の屋敷に毎年遊びに来ているとなればなおさらだ。

とりあえずそこまでは納得できた。しかし肝心な部分が抜け落ちて  
いる。

「余所者の俺に何が出来るのか…………だ。聞けばあんたに出来ない  
ことが俺に出来るとは思えないが」

「いいええ、それが出来ちゃうんですよ……ふふ、まあ、色々  
とね」

「勿体ぶらずにさっさと見え。俺は何をすればいい」

「では遠慮なく。単刀直入に言うんですけどね……八神力  
ゲロウの部屋を調べてもらいたいのです」

「叔父さんの……？」

八神力ゲロウ。この町の影の権力者であり古くから町を管理してき  
た男。

病院の院長であり、一年前の時も彼が率先して兄貴を探してくれた。

「しかし本当にそうでしょうか？もしかしたら八神力ゲロウが情報  
を隠匿しているとしたら？」

「叔父さんが……？ありえないな……そんな事をする必要が  
ない」

「いいですか、これは推測ですよ？私の個人的な、主観的な推測で  
すよ？しかし、仮にこうだとしたらどうでしょう……八神力ゲ  
ロウは遠山コウヤが失踪してしまった理由に何らかの形で関与して  
いるとしたら」

つまり、叔父さんが何らかの形である殺人事件に関与していたとす  
る。

そしてそれに何らかの形で巻き込まれた兄貴が、何らかの形で殺さ  
れてしまったと……そういうことだろう。

だからこそそれを公表せず、隠匿した。兄貴は失踪したことになり、

その後はぱったりと途切れる……。

「地元警察も八神家には近づけないようですね……正直調べようがなかったのですが」

「そこに俺が現れた……そしてあなたは地元の警察ではないと」  
笑顔を浮かべる。それが男の答えだった。

「なるほど、それは確かに俺が適任だ……だが俺は叔父さんが犯人じゃないと信じている」

あの叔父さんが猟奇殺人なんて考えられない。それに兄貴と叔父さんは非常に近い関係だったはずだ。二人ともちよつとしたことで関係がもつれるほど子供ではない。

それにそもそもあのインドアな二人には、強引に機器を使って死体を引きちぎる、何て真似が出来るとは思えない。

「では、何故カゲロウの妻は失踪したのでしょうか？」

「……………」

こいつ、そんなことまで調べたのか。

「かつての『彼女』の失踪、そして一年前のお兄さんの失踪、無関係とは思えないではありませんか」

それは確かにその通りだった。その理由も、その結果も、俺は知らない。

両者の事件に共通しているのは八神家、そしてこの小瀬という場所

だ。それ以上の共通点は存在しないし、するはずもない。だというのにこの二つが無関係だとは思えなくなっている自分がいた。それは図書館で見た写真のせいなのだろうか。ポケットの中、突っ込んだ手でそれを強く握り締める。

まさか、とは思いつながらもその可能性に胸が動かされつつある。確かに疑問は沢山、沢山あった。

どうして彼らは人が一人居なくなったというのにああも平然としていられたのだろうか。それは俺を傷つけないため？本当に俺のためなのか？

話題を避けることも、俺に事件のことを教えなかったのも、本当は自分たちが関わっているからではないか。

最悪な想像に思わず息が詰まる。夕暮れ時、涼しくなってきたというのに汗が止まらなかった。

仮に、仮にだ。そうだとしたら、俺が一番真実の近くに居たのに、それに気づいていなかったのか。

まさに灯台下暗し。俺は常に見張られていたのかもしれない。

「まあ、いいではありませんか。違ったなら違ったで、信用になるでしょう」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

全くの正論すぎて反撃する隙がない。

そうだ。違ったら違ったで彼らの潔白が証明されるだけではないか。一体何を恐れるというのか。

むしろ彼らを信じるというのであれば、このわけのわからない男の疑いを晴らすべきではないか。

そうすれば少なくとも、明日から後ろに誰か立っているんじゃないかなどと言う心配はしなくて済む。

「……………どうすればいい？」

俺の前向きな返答に男は嬉しそうに笑う。

「彼の手記かなにかがあれば最高なのですが、わざわざ殺人の記録を残している人間なんていないでしょうねえ……まあ手がかりになるものならなんでもいいですから。これ、私の電話番号です」

辛うじて携帯電話が通じるのは荒川までだが、一応連絡は取れるだろう。俺はメモの切れ端を受け取りポケットに突っ込んだ。

「では協力関係成立ですね。その祝いというわけではありませんが、これを差し上げましょう」

高山が差し出したのは一枚の写真だった。場所は恐らく荒川の駅前だろう。写真の隅、長く髪を伸ばした女性が映っている。

カメラを肩から下げたその女性は写真の画面の外にある何かを見つめているようだ。

横顔、しかも不明瞭なアングル……これはどこからどう見ても盗撮のそれだった。

「なんだこれは……確かに美人だが、俺には関係ないだろう」

「いいえ、それがあるんですよ」

男は今までで最高の笑顔を浮かべて言う。

「彼女は一年前、あなたのお兄さんと行動を共にしていた女性です  
から」

最高に、嫌気が差す笑顔を。

屋敷に戻ると玄関先でカガリとみっちゃんが待っていてくれた。

戻るなり嬉しそうに飛びついてくるカガリの頭を撫でながら、俺は全くその話を聞いていなかった。

みっちゃんがカガリに手を振り、何か言って帰って行くのを見送る。その間俺は俺ではない誰かになってしまったかのように、ただ反射的に話をあわせていた。

昔からそうだった。俺はいつも自分を客観的に捕らえてきた。だから人に合わせられる。本音を出さなくとも。

ここではそんなこと必要ないと思っていた。けれどあのカガリにすら警戒心を抱き始めている自分がいる。

「お兄ちゃん、明日も頑張ろうね」

「……………ああ」

屋敷に戻り、玄関を越え、客間に戻る。

畳に座り落ち着いて思考をめぐらす。

その頭の中を巡っているのは、自分でも恐ろしいほど冷静な『この屋敷』の調べ方だった。

明日はやることが沢山ある。今日中に計画を練り、明日に備える必要があるだろう。

高山は確かに物騒で胡散臭いが、少なくとも頼りにはなる。そうだ、元々余所者である俺に頼れる人間なんていなかった。

だとすれば多少胡散臭かろうが関係ない。利用できるのならばその手に乗るまでだ。

それに重要な手がかりを手に入れた今、多少の出来事は俺にとって  
どうでもよくなっていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・水城アズサ、か」

写真の中に居る女に対して敵意を抱いている自分が居る。

カガリたちを疑いたくないから、こいつが殺したんだと思いたがっ  
ている自分がいる。

兄貴は死んだと、決め付けてしまっている、自分が居た。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9689c/>

---

Noise

2010年10月17日01時48分発行